ドム語の多義 – 知覺動詞を中心に*

千田俊太郎

キーワード: ドム語, パプア諸語, 知覺動詞, 多義, 意味論

概要

ドム語の動詞は小さな閉ぢた語類であり、その數は 140 語ほどにしかならない。その多くが廣い意味にわたつて使はれる。本稿で扱ふ知覺動詞もその例に漏れない。ドム語の知覺述語のうち最も基本的なものは *ˊkan-* 「見る」と *ˋpl-* 「聞く」の二つの動詞である。これらはともに、基本義としてもつ「知覺」のほか認知や經驗の意味をもカバーする。

このやうにカバーする意味の範圍の面では一見平行した振る舞ひを示す「見る」と「聞く」だが、目的語の取り方に關する相違點など、その使用にあつては多岐にわたる非對稱性も觀察される。連語關係、統語環境を檢討すると、認めるべき語彙的意味は *ˋpl-*については 1) 「聞く」、2) 「感じる」、3) 「(歌、言語を) 知つてゐる」、4) 「考へる」、5) 「... だと思ふ」、の五つ、*ˊkan-*については 1) 「見る」、2) 「見て... だと思ふ」、3) 「經驗がある」の三つが少なくともあると言へる。

*ˋpl-*の基本義は「聞く」、*ˊkan-*の基本義は「見る」だと考へられる。*ˋpl-*が示す二つの意味派生、すなはち「聽覺」から「非視覺」一般への意味擴張と「聽覺」から「認知」への意味轉用は *ˋpl-*以外にも平行例をもつてゐる。前者に關聯する例として動詞 *ˊd-*「言ふ、音が鳴る」が非視覺證據のエヴィデンシャルに發展したこと、後者に關聯する例として名詞 *ˊkna* 「耳」がしばしば認知に關る慣用句 (例へば *ˊkna ˊgi ˊd-* 「耳が聞こえない、忘れる」) において使はれることを擧げた。

* 本稿は日本オセアニア學會第 22 回研究大會 (2005 年 3 月 21 日) における口頭發表「ドム語の見ると聞く」、本稿と同題の京都大學言語學科の大學院演習 (2005 年 4 月 15 日) 發表、東京大學言語動態學研究室のセミナー (2005 年 10 月 14 日) 發表がもとになつてゐる。さまざまな段階でコメントをくださつた松村一登先生、角田太作先生、Matt Berends さん、大西正幸先生に感謝する。

1　はじめに

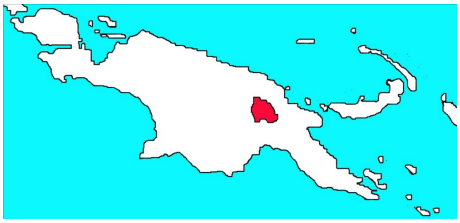

圖 1　シンブー語族

ドム語はパプア・ニューギニアのシンブー州、グミネ地區とシネシネ地區にわたるドムと呼ばれる一部地域に住む人々の使ふことばである。話者は 16000 ほどゐると思はれる (Tida, 2006)。

母音音素には /i, e, a, o, u/、子音音素には /p, b, m, t, d, n, k, g, s, l, r, w, y/がある。長短の對立は語末の /a/ vs. /aː/ のみにある。/b, d, g/ と /p, t, k/ で音素表記してゐる閉鎖音は前鼻音化有聲音 [mb, nd, ŋg] と非前鼻音化無聲音 [p, t, k] の對立をなす。多音節語の語末で /e/ は自由に脱落する。子音一つからなる語は單獨で發音されるとき /i/ が語末に付加される。許されない子音連續には非音素的 [ɨ] が插入される。語聲調言語であり高 (˥)、下降 (˥˩)、上昇 (˩˥) が語を領域として區別される。

主要な語類に名詞、形容詞、動詞があり、その他代名詞、後置詞、間投詞等が文法的な振る舞ひを共有する語類として認められる。接辭は接尾辭しかない。動詞の接尾辭に若干融合的なことがある。統合度はそれほど高くなく、語根につく接尾辭はたかだか三つまでである。主要部標示的な言語であり、動詞には主語の人稱・數、名詞には所有者の人稱・數が標示されるが、主語や目的語に對する格標識はない。複數の語からなる語彙項目 (句動詞やいはゆる慣用句的なもの) が非常に多い。

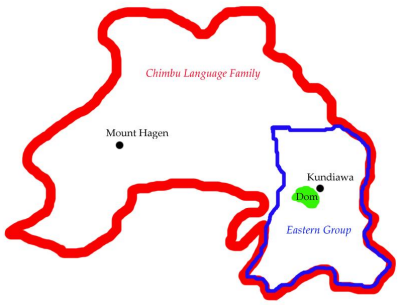

圖 2　ドム語

主要部が基本的にあとに來る。例へば動詞は節の最終要素、自動詞文は常に SV、他動詞文は AOV が好まれ、所有者など名詞類が名詞類を修飾するときは主要部に先行する。しかし形容詞類は主要部に後續する例外もある。他の文法的特徴には動詞連續、節連鎖、後續節の主語同一性標示がある。

1.1　ドム語の「見る」と「聞く」

本稿での主な關心は、ドム語の二つの知覺動詞、*˩˥kan-*と *˥˩pl-*の意味の幅である。それぞれ、文脈により、つぎのやうに日本語に譯出可能である。

(1) /kan- 「見る、知つてゐる、思ふ、〜してみる、〜したことがある」
\pl- 「聞く、感じる (味覺、嗅覺、觸覺、痛覺、感情)、知つてゐる、信じる、理解する、思ふ、考へる、言ひつけを守る、〜してみる、〜したことがある、腰簑等をつける」

おほまかにはこの譯語から、二つの知覺動詞がかなりの意味的な幅をもつこと、特に *\pl-* は視覺以外の諸知覺すべてを指すこと、*/kan-* と *\pl-* の兩方が認知的意味や經驗・試圖の意味をもつやうに思はれ、多義の在り方がパラレルであるやうに見える。しかし實際には、後述するやうに、この二つの動詞の意味は多くの非對稱を示す。

1.2 ドム語より大きな視點から

1.2.1 パプア諸語と意味論

パプア諸語に關する意味論的な研究には、主に存在動詞を主題にした、複數語彙の使ひ分け (類義) に關する研究 (Lang, 1975; Piau, 1981; Rumsey, 2002; Heeschen, 1982) や、同一語彙の使ひ廻し (多義、轉用) に關する研究 (Laycock, 1975, 1986; Osmond, 2001; McElhanon, 1992) がある。また動詞多義の言語學的意味にまで言及したものに Pawley (nd) がある。

ところで、複數語彙の使ひ分けと同一語彙の使ひ廻しは同一言語の同一意味領域に起こりうる。ドム語の知覺動詞のばあひ、「知覺」などを表すために二つの動詞を使ひ分けるといふ側面と、それぞれの動詞が知覺以外の意味領域である認知 (「知つてゐる」など) や經驗 (「〜してみる」) などにわたつて使ひ廻されるといふ側面がある。

1.2.2 知覺に關する一般論

知覺の種類をどのやうに分節するか、といふことは、言ふまでもなく文化依存的、言語依存的な問題である。知覺・感覺を「五感」(視覺・聽覺・嗅覺・味覺・觸覺) といふやうに五つに種類分けするのは「五感」といふ表現をもつ文化に特有の分節である (Classen, 1993, 1-2) [1]。振り返つてみれば、胃の痛みのやうな感覺は「五感」のどれにあたるのか不明だし、リズム感覺のやうな聽覺・視覺などほかの感覺を媒介としながら別の相で把握されるものも「五感」の中には入つてゐない (Mach, 1918)。

しかも、この「五感」といふ分類は、例へば日本語の語彙體系に反映されてゐるわけで

[1] In the West we are accustomed to thinking of perception as a physical rather than cultural act. The five senses simply gather data about the world. Yet even our time-honoured notion of there being five senses is itself a cultural construction. Some cultures recognize more senses, and other cultures fewer. (Classen, 1993, 1-2)

もない。基本的な知覺動詞はだいたい「見る、聞く、嗅ぐ、味はふ」で視覺、聽覺、嗅覺、味覺を代表させることができるかもしれないが、觸覺については「觸れて感じる、からだで感じる」などと迂言的に表現するしかない。そもそも「見る、聞く」が意思性に關はらず用ゐられるのに對し、「嗅ぐ、味はふ」は「知覺する」といふよりは、ある樣態を伴つた意思的な動作であり、若干異なる種類の動詞とも言へる。すると日本語の基本的な知覺動詞は、定義によつては「見る、聞く」に加へ、視覺・聽覺以外の知覺全てをカバーする「感じる」の三つと考へることも可能である[2)]。かう考へると、ドム語の知覺動詞が二つであるといふことは、言語がその語彙の體系によつて示す恣意的な世界の分節の現はれ方の一つとして不思議ではない。知覺動詞が「見る」と「感じる」の二つで對立する構圖である。

知覺を意味する動詞が認知の意味に轉用されることは多くの言語で報告されてゐる。知覺-認知間の轉用において興味深いのは、どのやうな知覺動詞が認知動詞として使はれうるのかといふことである。インド・ヨーロッパ系の言語について、Sweetser (1990, 37) は視覺に關する知覺動詞 (「見る」) がしばしば理解や思考を表はす認知動詞 (「分かる」「考へる」) に轉用されるのに對し、聽覺に關する知覺動詞 (「聞く」) の認知動詞への轉用は限られてゐるとしてゐるが[3)]、オーストラリア原住民諸語の知覺動詞に由來する認知動詞はまづ聽覺を表はすものと決まつてゐるやうだ (Evans & Wilkins, 2000, 547) [4)]。

パプア諸語の知覺-認知動詞はオーストラリア原住民諸語に似たパタンを示すと考へられる。つまり聽覺 (「聞く」) を表はす知覺動詞が「分かる」や「考へる」といふ意味を表はす認知動詞に轉用されることが多い。例へば Hallpike (1979) は「原始社會において「理解すること」を聞くことと同一視することは非常によくあること」としてニューギニアのパプア諸語の例を擧げてゐる[5)]。

---

2) Onishi (1997) の自然意味メタ言語理論による分析によると「見る、聞く」は最も基本的な知覺の意味の語彙的現はれであるのに對し、「感じる」は意味的に複雜な構造をもつてゐる。

3) The objective, intellectual side of our mental life seems to be regularly linked with the sense of vision, although other senses ... occasionally take on intellectual meanings as well. (Sweetser, 1990, 37)

[H]earing is connected with the specifically communicative aspects of understanding, rather than with intellection at large. (It would be a novelty for a verb meaning “hear” to develop a usage meaning “know” rather than “understand,” whereas such a usage is common for verbs meaning “see.”) (Sweetser, 1990, 37)

4) ... Australian languages regularly recruit verbs of cognition like ‘think’ and ‘know’ from ‘hear’ rather than ‘see’ ... (Evans & Wilkins, 2000, 547)

5) This inability to analyse private experience, as opposed to social behaviour, the paradigm of the knowable, is well illustrated by ethnographic evidence from the Ommura, of the Eastern Highlands Province of Papua New Guinea. Like many primitive peoples in New Guinea and elsewhere, the Ommura use the same verb (*iero*) for ‘understanding’ or ‘comprehending’, and the ‘hearing’ of a sound etc. ... (The equation of ‘understanding’ with hearing is very common in primitive society and is, of course, quite consistent with the statements of Piaget’s subjects that ‘we think with our ears’.) (Hallpike, 1979, 393-394、Ommura に關しては J. R. Mayer の情報による)

同一語彙である幅の意味を表はすことが本來的な意味での「同一視」なのかどうかは意味論的には大きな問題となりうる。當該語彙が一つのおほまかな意味 (概義、一般義) をもつのか、それとも多義 (關聯する別の意味をいくつかもつこと) を示してゐるのか、そして、更には、單なる同音異義なのかといふ問題である。

Wierzbicka (1996) は同一語彙で知覺と認知の兩方を意味する言語があつても、その話者が知覺と認知との區別をしないといふわけではない、「聞く」の意味と「知る」の意味の兩方に使へる語は多義と考へるべきである、そのやうな語彙は通常、「聞く」と「知る」の意味の違ひに結び付いた統語的な違ひをももつ、と考へる[6)]。もし「意味の違ひ」がなんらかの形で形式に反映されてゐるのであれば、それは本當に意味の違ひがある言語學的な證據となる。Wierzbicka (1996) は「聞く」と「知る」の意味の違ひは言語普遍だと考へてゐる。

ところで、「聞く」と「知る」の兩方の意味にわたる用法をもつた語彙の意味が、おほまかな意味 (曖昧性) ではなく別々の意味 (多義性) であるとしても、別々の意味を一形式に押し込めたところに言語學的な意味がないわけではない。實際、同音異義と多義は普通區別される。

1.3　ドム語の多義とその背景

知覺動詞に限らず、ドム語には一形式で複數の意味を表はす、あるいは非常におほまかな意味をもつものが多い。例へばつぎのやうな語彙は相當に幅廣い意味を表はす。

(2)　ʎmapn　「(木の) 根元、初め、行なひ、習慣、理由、原因、老いた[7)]」
　　ʎgui　「風、空氣、寒さ、つめたさ」

The Gahuku-Gama [of New Guinea] do not ascribe any importance to the brain, nor have they any conception of its function. Cognitive processes are associated with the organ of hearing. To ‘know’ or to ‘think’ is to ‘hear’ (*gelenove*); ‘I don’t know’ or ‘I don’t understand’ is ‘I do not hear’ or ‘I have not heard’ (*gelemuve*). (Read, 1955, 265n、Hallpike 前掲書より孫引き)

6) It is true that many non-Western societies use the same word for ‘think’ and ‘hear’ or for ‘know’ and ‘hear’. But what exactly does that prove? In English one can use the word *see* to mean ‘understand’ (“I see what you mean ...”), but this does not prove that the speakers of English do not distinguish the concept of ‘understanding’ and the concept of ‘seeing’. (Wierzbicka, 1996, 198)

A word which is used for both ‘hear’ and ‘know’, and which can be used in a sentence incompatible with a ‘hear’ interpretation, must be interpreted as polysemous; and when one looks for syntactic differences linked with the difference in meaning one can usually find them. (Wierzbicka, 1996, 200)

7) *ʎmapn* といふ單語は「老いた」の意味では形容詞として振る舞ふ。その他の意味では名詞として振る舞ふ。

ドム語の語彙の示す多義の中には、Laycock (1986) が示した多くのパプア諸語に共通する多義パタンに従ふものも多い。つぎのやうなものである。

(3) ˥ere 「木、火」(Set IV)
˩gari 「身體、色」(Set VI) [8)]
˧mle[9)] 「卵、實、種、粒、指」(Set IX)

知覺動詞に關しても「聞く」が他の知覺をもカバーしたり、認知的意味に發展した例が他の多くのパプア諸語にもみられることは前節に見た通りである。

ところで、トク・ピシン[10)]の語の意味に同様のパタンで多義を示すものも多い。

(4) as 「(木の) 根元、理由、原因」(ドム語の (2) *˩mapn* 参照)
paia 「火、薪」(ドム語の (3) *˥ere* 参照)

トク・ピシンにパプア諸語と類似の多義パタンが見出せることは不思議ではない。注目すべきは、トク・ピシンといふ、おほまかな意味をもつ限られた數の語彙しかもたない言語、つまりより多義語を多く持つと豫想される言語より、ドム語 (そしておそらく他のパプア諸語) の多義の方が甚しいばあひも多いといふことである。木の種類や鳥の種類を表はす單語はドム語で區別できるがトク・ピシンでは無理なばあひが多いのに、知覺・認知動詞に關してはトク・ピシンが區別する概念をドム語が區別しないといふことが起きてゐる (§2.4)。

品詞の中でも特に動詞は際立つて多義的、あるいは概義的である。つぎのやうに類義ばかりからなる多義語もある。

(5) ˩mol- 「(動物が) ゐる、(水が) ある、(埃などが) 舞つてゐる、詰まつてゐる、密にある」
˧yu- 「(タロ芋を) 收穫する、(食用の木の葉を) 收穫する、(蔓性植物を) 採る」
˩bl- 「腐る、消化される、土が泥の状態である、(雨に降られるなどして) 水をかぶる、(からだに) 塗る、調理のため灰の中に突つ込む」

上のやうな例では、分析によつては一般義であることを示せる可能性もある。

---

8) Laycock (1986) の Set VI は「皮」の意も含むがドムでは「皮」に別の語 *˩gapl* を使ふ。

9) ドム語の *˧mle* と同様の多義を示す他のシンブー諸語の語彙については Osmond (2001) が詳しく記述してゐる。

10) トク・ピシンはパプア・ニューギニアの舊獨領ニューギニア地域と都市部を中心に、人口の約半分ほどの人々が共通語として使用する、語彙の大半が英語由來のピジン・クレオールである。ドム地域はトク・ピシンを共通語として使ふ地域であり、ドム語話者のほとんどが流暢に話すことができる。

が、つぎのやうに類義とは言へないさまざまな意味を同時に表はす動詞も多い。

(6) ˊke- 「建てる、蒸す、茹でる、(傷が) 癒える」

ˋs- 「打つ、撃つ、集める、得る、(樂器を) 彈く、(川が) 増水/氾濫する、(風邪を) 引く、(雨が) 降る、(花が) 咲く、(湯が) 沸く」

ʌbol- 「被る、(肉などを) 切る、戰ふ、(脂が) のつてゐる、(花に水を) やる、(値段が) する、書く、插す、(杖を) つく、(太鼓を) 叩く」

ʌkol- 「汲む、しばる、身體を動かす、(刃物を) 作る、(橋を) 架ける、(バナナを熟れさせるため) 土中に埋める、(實が) なる、くつつく、仲良くなる、間にはさまつてある」

ドム語では動詞が小さい閉ぢた類であり 140 弱の動詞語根しか見付かつてゐない。實はドム語だけ特別に動詞が少ないのではなく、パプア諸語には 60 から 150 ほどの動詞しかもたない言語が多い (Pawley, nd, 1)[11]といふからドム語はその中ではむしろ多めの動詞をもつてゐるのかもしれない。どちらにせよドム語においては一つの動詞語根に課される役割が大きい。多くの動詞が概義的、多義的である原因の一半はここにある。

多くの動詞が概義的、多義的だからといつて曖昧なことしか表現できないわけではない。ドム語において、動詞の關はる概念の細かい意味の違ひを補足する手段には、動詞連續、名詞 + 動詞の句がある。動詞連續にも名詞 + 動詞の句にも細かくみるといくつかの種類が認められる。動詞連續は動詞 + 動詞の句であり、意味的に透明なもの、慣用的なもの、後續要素がアスペクトなどを表はす文法的要素であるものがある。名詞 + 動詞の句には、主語 + 述語、目的語 + 述語からなるものがあり、その中にはそれぞれ、意味的に透明なもの、慣用的なものがある。その他、動詞的意味をもつ名詞がなんらかの動詞を伴つて述語を構成してゐるばあひがある[12]。派生接辭や複合は行はない。

---

11) In New Guinea a number of languages of the Trans New Guinea family have between 60 and 150 inflecting verbs, and all or nearly all verb roots can occur as independent verbs. These include the Chimbu-Wahgi languages centred in the Western Highlands and Chimbu Provinces of Papua New Guinea and Kalam and its close relative, Kobon, spoken in the Bismarck and Schrader Ranges, Madang Province.(Pawley, nd, 1)

12) 本稿で「動詞的意味をもつ名詞」とするものはドム語においては名詞の下位類をなすと考へられ、これに後續する動詞は屈折語尾を運ぶための形式的な添へ物 (輕動詞) である。このやうな「動詞的意味をもつ名詞」はパプア諸語研究者のいふ verb-adjunct、豪州原住民語研究者のいふ preverb/coverb にほぼ該當する。

1.4　本稿の目的

本稿ではドム語の知覺動詞 *∧pl-*と *∨kan-*の意味を記述する。その上で多義に關する問題 (同義、類義/多義、異義) について論じ、基本義が何で、轉用された意味が何なのかを考へる (§2)。さらに知覺世界の二分割: 視覺 vs 非視覺 (非視覺: 聽覺、味覺、嗅覺、觸覺、痛覺、感情) や聽覺から認知への意味擴張が知覺動詞にのみ現はれるものではないことを示す (§3)。そして最後にドム語の知覺動詞研究が言語の一般論にどのやうに寄與できるか考へてみたい (§4)。

2　「見る」と「聞く」

意味の違ひが形式の違ひに反映されてゐるならば大まかな意味一つでなく多義であるといふことができる。この節では、ドム語の *∧pl-* の諸義、*∨kan-* の諸義がつぎの點で違ひをみせることを示す。

(7)　a. 目的語を取るかどうか、また取りうる目的語がどのやうな特徵をもつか
　　b. 特定の構文を取るか

その上で *∧pl-* と *∨kan-* の基本義について考へる。

また、多義性や基本義について傍證となりうるものとして、話者から與へられるトク・ピシン譯語やドム語話者のトク・ピシンの特徵も擧げる。

2.1　目的語

2.1.1　∧pl-

■「聞く」　*∧pl-*は聽覺を表はす意味 (「聞く」) では目的語を取れない。このことは一見、いくつかの偶然が重なつたためかとも思はれる。

たとへば、*∧pl-* は他の知覺を表はすばあひにも刺戟の發生源、つまり聲を發した人や音聲を發した物體は原則として目的語として取らない[13]ことが分かつてゐる。ところが、ドム語には「音」といふやうな一般的な聽覺刺戟を表はす名詞がない。また「ことば」を表はす *⌈ka* を目的語として取ると *⌈ka ∧pl-* 「聞き分けがある」といふ慣用句にもなる。この

[13] 日本語でも「その人を聞いた」が不自然であり、動詞「聞く」は發話者等の音聲の發生源を目的語として取らない。しかし、英語では「聞く」の目的語として音聲の發生源をとる “Can you hear me?” や “Listen to me.” が可能である。つまり、刺戟の發生源を目的語として取りうるやうな知覺動詞をもつ言語はある。

やうに、目的語が知覺刺戟の種類に限られてゐるところにもつて、聽覺刺戟の種類を表はす名詞が偶然に缺落してゐたり、動詞 *∧pl-*と共起できなくなつたりしてゐる、といふ可能性がある。

しかし、目的語に取れさうな音聲刺戟の種類を表はすことばは他にもたとへば *∧kuria*「歌」、*⌈no*「首、喉、聲」、*⌈ka∨pore*「話」などがある。これらを目的語として取ると *∧pl-*は「聞く」の意では使へず、「知つてゐる」等の認知の意味でしか使へない。

「聞く」が目的語を取れない代はりに從屬節を使つてつぎのやうに表現する。

(8) *∧du-gwa* *∧pl-* 「言つた/音がする (のを) 聞いた」
say-3SG.SRD perceive-

ドム語には從屬節の述語を作る動詞語尾が複數あるが、「聞く」が從屬節をとる場合は、意味機能が中立的で、場所や時間、主節の背景となるできごとを廣範に導入する從屬法の語尾を用ゐる。

■「感じる」 *∧pl-*は知覺される刺戟の種類/感情の種類を目的語として取る。つまりバナナ (刺戟の發生源) の匂ひ (刺戟の種類) を「感じる」のであれば「バナナ」ではなく「匂ひ」を目的語に取る。

(9) a. *∨mnan* *∧pl-* 「匂ひを感じる」
smell perceive-
b. *∧giul* *∧pl-* 「痛みを感じる」
pain perceive-
c. *∧kurl* *∧pl-* 「恐れを感じる」
fear perceive-

この種の目的語 + *∧pl-* における *∧pl-* は、すべてのばあひにおいて *∧gol-*「... でたまらない」に置き換へてもだいたい同じ意味を表はす。一方、「聞く」意味の *∧pl-*は *∧gol-*に置き換へられない。動詞 *∧pl-*は「聞く」といふ聽覺の意味で用ゐられるばあひと「感じる」といふ視覺聽覺を除いた知覺の意味で用ゐられるばあひでは、目的語が取れるか、*∧gol-*に置き換へが可能かといふ二點で異なる振る舞ひを示す。意味の違ひが形式的な違ひに反映されてゐるのだから、*∧pl-* の意味として「非視覺的に知覺する」といふ一般義は想定できず、少なくとも「聞く」と「感じる」にわたる多義を認めなければならない。

知覺される刺戟の出所を目的語とするばあひもあるが、つぎのやうな限られた慣用表現である。

(10) *⌈er* *∧pl-* 「火 (の熱さ) を感じる」
fire perceive-

「火の熱さを感じる」といふ意味の上の表現で、*∧pl-*の目的語として「熱」のやうな刺戟の種類を表はす名詞ではなく、*⌈er* といふ「火」あるいは「薪」を表はす名詞を撰んでゐるのは特異なパタンである。

「感じる」の意味でも、動詞 *∧pl-*は従屬法の述語をもつ従屬節を取ることができる。

(11) *∨dl* *∧su-gwa* *∧pl-* 「悪臭がする (のを) 感じた」
bad.odour (hit)-3SG.SRD perceive-

■「知つてゐる」 *∧pl-*は「知つてゐる」の意では、音聲の種類を目的語として取る。

(12) a. *??∧yal* *∧i* *∧pl-* 「??その人を知つてゐる」「*その人を聞く」
man DEM perceive-
b. *∧kuria* *∧pl-* 「歌を知つてゐる」「??歌を聞く/*感じる」
song perceive-
c. *∧tokples* *∧pl-* 「言語を知つてゐる」「??言語を聞く/*感じる」
language perceive-

つぎの U と M との實際の會話では *∧pl-* が聽覺の意味「聞く」と認知の意味「知つてゐる」の兩方の意味で用ゐられてをり、U が「(歌を) 聞いたことはあるが (自分で歌へるほどには) 知らない」ことが對話の中でうまく傳はつた。「知る」文脈では *∧kuria*「歌」をそのまま *∧pl-*の目的語とすることができ、「聞く」文脈では「(だれかが歌を) 歌つたこと」を表はす *∧du-gwa* (say-3SG.SRD) *∧du-gw+⌈i* (say-3SG+DEM) が *∧pl-*に先行することで意味を明確にできる。

(13) M: *∧a* *∧kuria* *⌈en* *⌈ta* ***⌈p+∨k-n=(∧)wa*** *⌈da*
oh! song you NEG perceive+NEG-2SG=ENC.WA tag.question
「ていふか、歌は (お父さんは) **知らない**んでせう?」
U: *⌈na* *⌈ta* ***⌈pl+∨k-ike***
1EXC NEG perceive+NEG-1SG.IND
「わし**知らん**」
M: *∧du-gwa* *∨kuna⌈i* *⌈en* ***∧p-n=∧ua*** *⌈da*
say-3SG.SRD around .DEM you perceive-2SG=ENC.WA tag.question
「歌つてゐるのなんかを**聞いた**んでせう?」

U: *∧du-gw+⌈i* *∧du-gw+⌈i* *⌈na* ***∧pl-ke***
say-3SG+DEM say-3SG+DEM 1EXC perceive-1SG.IND
「歌つてゐるのは... 歌つてゐるのは**聞いた**」

M: *∧kuria* */yel* */yel* *∧du-pn=∧ua* *∧du-gwa*
song like.this like.this say-1PL=ENC.WA say-3SG.SRD
⌈en ***∧p-n=∧ua*** *⌈da*
you perceive-2SG=ENC.WA tag.question
「歌をかういふ風に歌ふんだ、て言つてゐるのを**聞いた**んでせう?」

U: */yel* */yel* *∧du-pn=∧ua* *∧du-gwi*
like.this like.this say-1PL=ENC.WA say-3SG.DEM
⌈na ***∧pl-ke***
1EXC perceive-1SG.IND
⌈na *⌈ta* ***⌈pl+/k-ike***
1EXC NEG perceive+NEG-1SG.IND
「かういふ風に歌ふんだ、て言ふのは**聞いた**。わし**知らん**」

最後の文では同じ動詞 *∧pl-*の肯定の形式が「聞いた」ことを表はし、*∧pl-*の否定の形式が「知らない」ことを表はす。前者は *∧du-gw+⌈i* (say-3SG+DEM) 「歌つたこと」が *∧pl-* に先行する構文から意味が明らかであり、後者は一連の對話で状況把握ができてゐれば理解が可能である。

■「考へる」 *∧pl-*は認知動詞「考へる/思ふ」の意味では、つぎのやうにどんな名詞句でも取れる。

(14) a. */barsu* *∧pl-* 「飛行機のことを考へる」
airplane perceive-
b. *∧kuria* *∧pl-* 「歌のことを考へる」
song perceive-
c. *∧yal* *∧i* *∧pl-* 「その人のことを考へる」
man DEM perceive-

この意味では *∧pl-e*「～を思つて」と、同一主語の從屬節の形[14)]を取り、日本語では「～のために」と譯出できるやうな文脈でよく使はれる。

---

14) 同時的、あるいは繼起的なできごとを導入する動詞語尾は主從の節の主語が同一か異なるかによつて別の形式を取る (スウィッチ・リファレンス)。

(15) *gol-/a-l* *(⌈)d* *∧el* */pa-gwa* */pa-m=(∧)ba*
die-FUT-1SG Q make.INF lie-3SG.SRD INFERRED-3SG=but
⌈na ***∧pl-e*** *∧sul* */pa-gwa* */pa-gwe*
1EXC perceive-CONJ(SS) wait lie-3SG.SRD INFERRED-3SG.IND
「(おばあちやんは) もう死ぬ、ていふところだつたやうなんですけど、私のことを思つて待つてゐたやうです。」

2.1.2 */kan-

/kan- は知覺される刺戟の出所を目的語として取る。視覺的に認識不可能なものごとは目的語に取れない。

(16) a. */barsu* */kan-* 「飛行機を見る/知つてゐる」
airplane see-
b. *∧yal* *∧i* */kan-* 「その人を見る/知つてゐる」
man DEM see-
c.**∧kuria* */kan-* (歌を見る/知つてゐる)
song see-

もう一つの知覺動詞 *∧pl-* の取りうる目的語との違ひに注意したい。*∧pl-* は知覺の意味では刺戟の種類しか目的語になりえない。一方、*/kan-* を使つた (16a) では、「飛行機を見る」ことは「飛行機」によるある種の視覺刺戟 (姿/形/色) を感知することだが、刺戟の出所である「飛行機」を目的語とする。

視覺的に認識可能なものごとを表はす目的語を取る場合、日本語では「見る」と「知つてゐる」と兩方に譯出ができる文脈で使はれる。目的語の取り方に「見る」の意味と「知つてゐる」の意味とで違ひは見出せない。意味的にも */kan-*が「知つてゐる」といふ別の意味を發展させたとは言へなささうである。

從屬法の述語をもつ從屬節も取る。

(17) *⌈na* */yel* *∧el-gwa* */kan-* 「このやうにしてゐる (のを) 私は見る」
1EXC like.this make-3SG.SRD see-

2.2　知覺動詞が他の動詞に後續するばあひ

ドム語では動詞語根が別の動詞に連なる動詞連續が多用される。この節では知覺動詞が他の動詞の語根に後續する形の動詞連續を見る。

2.2.1　/kan-

*/kan-*は單獨では「經驗する」といふ意味は表はせないが、さまざまな動詞に後續し、「V してみる、V したことがある、V する仕方を知つてゐる」ことを表はす。例へば動詞「*ne-*「食べる」に */kan-*が後續した「*ne /kan-*は「食べてみる、食べたことがある、食べ方を知つてゐる」ことを表はし、「食べ」かつ「見る」意味にはならない。またこの際、味覺に關はる經驗に焦點はあたらない。動詞 +*/kan-* の動詞連續は「見る」意味が含まれず、先行要素に「試圖/經驗/知識」の意味を附加すると言へる。

先行要素となりうる動詞は */au-*「觸る」*\el-*「作る」など他動詞が多いが、行爲であれば、その撰擇に制限はほとんどない。

異なる構文に現はれ、「見る」意味を表はさないのであるから */kan-* のもつ別の意味と考へてよい。

2.2.2　\pl-

*\pl-*は知覺手段行爲を表はす動詞を先行要素として動詞連續を構成できる。逆に *\pl-* だけでは曖昧な知覺の種類を特定してゐるとも見える。

(18)　a. */au　　\p-ka　　「gl　　\du-gwe　　*「觸つ (て感じ) たら固かつた」
hold.INF　perceive-1SG.SRD　strong　(say)-3SG.IND

b. 「*ne　　\pl-*　　「食べて/飲んで感じる」
eat.INF　perceive-

「*ne \pl-* 「食べてみる、食べたことがある、食べて味を知つてゐる」のやうな含みを持つこともある。しかし */kan-* のばあひと異なり、動詞 +*\pl-* の動詞連續で表はすイベントには「(非視覺的に) 感じる」經驗が必須である。

試圖/經驗の意味をドム語で表現するために *\pl-* が必要となるばあひがあるが、先行する動詞の意味 +「知覺する」以上の意味が生じたとは認めがたく、*\pl-* が試圖/經驗といふ特別な意味をもつてゐるとは言へない。

組み合はせは生産的で、何を感じるのか文脈で特定できれば使へる。例へば *∧am ⌈d-*「坐る」に *∧pl-*をつけ、椅子の坐り心地などを「感じる」意味で *∧am ⌈d ⌈plo*「坐つてごらん」などと言へる。

2.2.3　知覺と經驗

一般的に經驗/試圖が、ただ「行爲した」のと異なる點は、行爲を通じた知覺體驗や知識獲得の部分だといへるのではないか。「試圖」と「經驗」とは同一概念の下位概念として定義できる可能性がある。以下では試圖/經驗/知識と個別に言及せず「經驗」と假にまとめておく。

經驗を表はす用法における *∨kan-*は、補助動詞的な機能語と言つてよい。動詞連續全體の項構造など統語的な可能性が本動詞たる先行要素によつて決まるからである。一般的に文法化は語彙的な内容をもつた語から文法的な機能語へといふ過程を經る。*∨kan-*のもつ經驗の意味は「見る」といふ本動詞としての用法から文法化を經た派生義と捉へることが可能と思はれる。

(19)　視覺→經驗 (「見る」→「してみる、したことがある」)

2.3　知覺動詞が引用節を取るばあひ

引用節[15)]を取るばあひドム語の二つの知覺動詞はただの「知覺する」ではなく、「(知覺して)... と思ふ」といふ意味で用ゐられる。この構文において、*∧pl-*、*∨kan-* は視覺的判斷根據の有無によつて使ひ分けされるやうに見える。

2.3.1　∨kan-

*∨kan-*はつぎのやうに「見て... だと思ふ」の意味で使はれる。

---

15) ドム語の引用は直示形式の振る舞ひが複雜で、直接話法と間接話法の二分法は成立しない。動詞に現はれる主語の人稱・數の形式は「元の」發話・思考の在り方と常に同樣であり、その點に關してはドム語の引用は必ず直接話法的であるとも言へる。また直示形式の振る舞ひと引用標識 *⌈d* の出現は相關してゐない。動詞 *⌈d-*「言ふ」の直前では引用節に引用標識があつてはならず、それ以外の動詞が主節の述語となる時は引用標識が義務的である。引用標識が動詞 *⌈d-*「言ふ」を出處とする文法化の過程にあるからだと考へられる (Tida, 2006)。

(20) *∧yopal ∧mol-m ⌈d* ***∨kar-ka=(⌉)mer=(⌉)rae***
person stay-3SG Q see-1SG.SRD=as/about=MUT
∧Dama ∨ama ∧yopal ∧mol-m ⌈d ***∨kan-gwa***
PRN too person stay-3SG Q see-3SG.SRD
「人間がゐると私が **(見て) 思つた**のと同様、ダマも人間がゐるのだと **(見て) 思つて**...」

このやうな用法における *∨kan-*は視覺的根據に基づく判斷を示す。[16)]

2.3.2 ∧pl-

*∧pl-*も「... だと思ふ」の意味で用ゐられる。

(21) a. *⌈ta ∨pai+(∨)k-m ⌈d ∧pl-* 「(足が痺れて) 無いやうに感じた」
NEG lie+NEG-3SG Q perceive-
b. *⌈ka ∧kipi ∧du-m ⌈d ∧pl-* 「嘘をついてゐると思つた」
word lie say-3SG Q perceive-
c. *∧i-ra-l ⌈d ∧pl-* 「手に入れようと思つた」
take-FUT-1SG Q perceive-
d. *⌈na ∧yu ∧gerl ⌈yorwa ⌈ere ⌈ila ∧ipe ∨na-pn-o? ⌈d ∧pl-igwa (∧)ikn ∧i*
1EXC just すつぽんぽん to inside up.there go.FUT-1PL-PQM Q perceive-2/3PL.SRD time DEM
「ぼくらこのまま裸で家に歸ることになるの!? と彼らが思つたその時...」

*∧pl-*が「... だと思ふ」の意味で用ゐられる場合、視覺的根據に基づく判斷には使へないが非視覺的な根據があるとは限らない。(21c,d) に見られるやうに、意思や疑問などのタイプの節を引用してもよい。つまり *∧pl-*の意味がそもそも判斷でさへない場合がある。

なほ、このやうに述語 *∧pl-*の前に引用標識によつて引用節が導入されてゐる構文では「〜と聞く」の意味には用ゐられない。

---

16) ところで知覺はその過程に一種の判斷を含む。人を人として見、雨を雨として聞くことができるのは世界を概念で分節する共同主觀的な機制に基く判斷によるもので、所與の世界そのままを知覺することなどない。動詞 *∨kan-*に先行する引用節は、このやうな、視覺といふ認識の「對象をそれ以上のものとして捉へる過程」に關する樣態付與と捉へてもいいかもしれない。もしこのやうな考へ方が正しければこのやうな *∨kan-* も「見る」の基本義と異なるものと看做さなくてもよいが、本稿では一旦知覺の相と判斷の相が意味論的に別物とする。

2.3.3　知覺と判斷、思考

*/kan-*と *\pl-*の本義を知覺ととれば、ともに引用節を取る構文においては判斷、思考の意味を發展させてゐるとしてよい。

(22)　知覺→認知的意味 (判斷、思考) (「見る、聞く」→「〜だと思ふ」)

ただし、*/kan-*と *\pl-*では本義に關聯する意味的な制約の強さは異なる。

2.4　トク・ピシン

結論先取的に二つの動詞の本義を知覺の意味としてゐたが、ドム語話者によつて與へられる譯語が、その傍證となると考へられる。

*/kan-*の譯語として選ばれることがある單語にはつぎのやうなものがある。

(23)　lukim 「見る」、lukluk (様態に焦點があたつてゐるばあひ)

「知つてゐる」の意でも “save” 「知つてゐる」と譯出されることはほとんどない。逆にトク・ピシンの “save” を譯すために */kan-* が必要となるばあひは多い。

\pl- のばあひ:

(24)　a. harim 「聞く」
　　b. pilim 「感じる」
　　c. smelim 「嗅ぐ、匂ひを感じる」
　　d. tingim 「思ふ、覺えてゐる、考へる」(他動詞用法が主)
　　ting (補文を取るばあひ)
　　tingting (様態に焦點があたるばあひ)
　　e. save 「知つてゐる、〜したことがある、習慣として〜する」

さまざまな譯語がありうるが、ほとんど harim 「聞く」で代用する譯し方もしばしば見られる。

そもそもドム語話者のトク・ピシンに見られる harim の用法はつぎのやうに *\pl-*の意味の範圍をカバーしてゐる。

(25)　a. harim smel 「匂ひを感じる/嗅ぐ」
　　b. mi harim pastaim 「私は (まづ) 考へて (から...)」

ドム語話者のトク・ピシン譯語、トク・ピシン使用において見られる *lkan-*、*lpl-* 對應語彙 (として同様の多義を見せるの) は、他の動詞でなく lukim、harim である。

2.5　まとめと考察

*lpl-*は、目的語の取り方、構文の取り方の違ひから少なくともつぎの多義を考へる必要がある。

(26) a. 聞く
b. (非視聽覺的に) 感じる、(感じて知つてゐる)
c. (ある音聲的對象を) 知つてゐる
d. 考へる
e. ... だと思ふ

上のうち、「聞く」以外の意味ではどのやうな知覺なのか、認知なのかを特定する構文、文脈を設けることができ、またそのやうな構文、文脈が頻出するのに對し、「聞く」の意味ではそれが不可能である。つまり「音を聞く」などと言ふ有標な表現自體がない。これは *lpl-*と言へば「聞く」であり、*lpl-*の本義が「聞く」であるからではないか。トク・ピシンで與へられる *lpl-*の基本的な譯語が harim 「聞く」であることもその傍證となると思はれる。

lkan- にはつぎの多義が認められる。

(27) a. 見る、(見て知つてゐる)
b. 見て... だと思ふ
c. 經驗がある、方法を知つてゐる

*lpl-*と同様に *lkan-*の本義は知覺の「見る」であると考へられる。

一見平行する *lpl-* と *lkan-* の多義の在り方は、實際にはつぎの點で非對稱性を示すことが分かつた。

(28) a. 「知覺する」の意味での目的語の種類
b. 「知つてゐる」の意味への特化
c. 「經驗」の意味への特化
d. 「... だと思ふ」の意味への特化、あるいは判斷根據の有無

「知覺する」の意味での目的語として、*∧pl-*は刺戟の種類、*∨kan-*は刺戟の發生源を取る。「知つてゐる」の意味への特化は音聲刺戟對象を取る場合の *∧pl-*に限つてみられた。「經驗」の意味への特化は *∨kan-*のみが示した。最後に「... だと思ふ」の意味では *∨kan-*のみが視覺的な判斷根據を要求した。

ところで、多義を構成する一つ一つの意味はまだ大分おほまかにもみえる。さらに細かい意味にわけることに言語學的な意味があるかどうか、つまり、例へば「(非視聽覺的に)感じる」が「觸覺的に感じる」「味を感じる」「匂ひを感じる」にわかれるか、最後に檢討したい。

カラム語の *nŋ* はドム語の *∨kan-*、*∧pl-* を合はせたやうな意味をもつが、このことについてつぎのやうな議論がある。

> [T]his doesn't mean that in Kalam the same verb (*nŋ*) means something "fuzzy" or intermediate between 'know', 'hear', and 'see' (as well as 'think', 'taste', 'read', 'feel sorry', and so on). Rather, we have to conclude that Kalam distinguishes lexically between 'know', 'hear', 'see', and 'smell' as follows: *nŋ*, know; (*wdn*) *nŋ*, see; (*tmwd*) *nŋ*, hear; (*kwy*) *nŋ*, smell.
>
> (Wierzbicka, 1996, 202)

Wierzbicka はこのタイプの語彙的單位 (lexical units) として實現されうる意味をすべて別個の意味として *nŋ* の多義性を考へるやうだ。ドム語にも似たやうな構成のあることは §2.1.1 の「感じる」の項、及び §2.2.2 に言及した。問題は、これらの表現が本當に語彙的單位なのかである。

ドム語のばあひを考へると目的語の種類は割合豐富、動詞連續は生産的で、*∧kurl ∧pl-* (怖さ 感じる) 「怖い」、*∧am ⌈d ∧pl-* (座る 感じる) 「座つて感じる」など、なんでもできる。このやうな組み合せは部分の總和からなる意味を表はす統語的な單位であり、語彙的單位とは考へられない。從つて、「怖い」や「座つて感じる」が多義的 *∧pl-* の一意味とは到底考へられない。

Wierzbicka の主張は、言語普遍たるべき意味原始單語として設定した概念のいくつかをカバーする單語があるばあひにそれを多義だとする、理論先行の議論に基づいてゐるやうにも思はれる。

3　∧pl-、∨kan- 以外の語彙、表現

動詞 *∨kan-*と動詞 *∧pl-*のカバーする意味範圍は視覺對非視覺といふ知覺の二分を行つてゐる。一つは積極的な規定に基づくもの、一つは消極的な規定 (視覺以外の知覺) に基づくものであり、それだけでも一見不均衡な對立を生み出してゐる。「視覺以外の知覺」といふまとまりは、多義の觀察からはさらにその中でも「聽覺」と「聽覺以外」に分かれる振る舞ひを示す。

∧pl- のカバーする非視覺といふ概念は、ドム語においてなんらかの意味的なまとまりをもつてゐるのだらうか。また知覺と認知といふ二つの概念領域はドム語において「似た者」扱ひと考へてよいのだらうか。*∧pl-* の表はす諸義が類似のものと把握されてゐるなら *∧pl-* は複數の類義をもつ多義語と考へるべきだが、さうでないならば別々の意味を表はす同音異義語である。

本節では知覺動詞以外に見られる、知覺動詞と同様の意味の振る舞ひ、意味擴張の方向を記述する。そして、これらはドム語の意味體系における非視覺といふ概念や知覺-認知の意味轉移の一貫性を保證するものであり、また *∧pl-* の基本義が「聞く」と考へてよい更なる傍證となると考へる。

3.1　エヴィデンシャル「d-

知覺刺戟事象を表はす述語には *⌈d-* といふ要素が後續しうる。*⌈d-* は動詞の屈折を取る。

(29) a. *∨mnan ⌈s-*　「匂ひがする」
smell　(hit)
b. *∨mnan ⌈s*　*⌈d-*
smell　(hit).INF　NONVIS

(30) a. *⌈gl*　*⌈d-*　「固い」
strong　(say)
b. *⌈gl*　*⌈d*　*⌈d-*
strong　(say).INF　NONVIS

(31) a. *∧don*　*∧el-*　「美味しい」
delicious　(make)

b. *∧don* *∧el* *⌈d-*
delicious (make).INF NONVIS

上記の例では*⌈d-* がついてもつかなくても意味が大きく變はらず、*⌈d-* がついた方は「私實際に感じてゐます」といつたニュアンスをもつのみである。

ところが、意味ががらつと變はるのがつぎのやうな例である。

(32) a. *∨kamn ⌈s-* 「雨が降つてゐる/降つた」
rain (hit)
b. *∨kamn ⌈s* *⌈d-* 「雨が降る (音/匂ひ/感じがする)」(見てゐない)
rain (hit).INF NONVIS

(33) a. *∧yopal ⌈ta ⌈u-* 「人が來る/來た」
person a come
b. *∧yopal ⌈ta ⌈u* *⌈d-* 「人が來る (音などがする)」
person a come.INF NONVIS

このやうな用法における*⌈d-* は、一見異なるはたらきをしてゐるやうに見えるが、「話者が出來事に對して非視覺的な證據をもつてゐる」こと、つまり非視覺證據のエヴィデンシャルを示す任意の標識とまとめられる。この意味では單獨で述語になれず、本動詞に後續する形で補助動詞的である。

ドム語における動詞連續における補助動詞的な後續要素は、本動詞としての用法も必ずもつてゐる。*⌈d-* は本動詞として「言ふ、音が鳴る」といふ意味をもつ。

語彙的な内容をもつた語から文法的な機能語へといふ一般的な過程を經たと考へれば、つぎの意味的擴張があつたと考へてよい:

(34) 音聲 (聽覺刺戟事象) →味覺、嗅覺、觸覺等の刺戟 (非視覺的刺戟に關はる事象全般)

「言ふ」が非視覺證據のエヴィデンシャルに發展しえたのは單に *∧pl-*と *∨kan-* による知覺の二分割によつて確立した「非視覺」概念がある、だけではなく、ドム語につぎのやうな、領域間の意味的擴張の方向があるからではないか。

(35) 聽覺關聯事象→味覺、嗅覺、觸覺等の關聯事象 (非視覺的知覺/刺戟に關はる事象全般)

非視覺的證據を持つ事象にしるし*⌈d-*を付け、視覺的證據を持つといふしるしはない、つまり非視覺的證據が形式的に有標である。[-視覺] のやうに消極的にしか定義できなさ

さうなのにむしろ積極的な形式をもつことに注目したい[17)]。

3.2 「kna「耳」を含む慣用句

ドム語の*⌈kna*「耳」を含む多くの慣用句がつぎのやうに認知表現として使はれる。

(36) a. *⌈kna* *⌊gi* *⌈d-* 「耳が聞こえない、耳が悪い」「うつかり忘れる、ばかなことをする」「ばかである」
ear.3SG.POSS fast (say)

b. *⌈kna* *⌋gur-* 「耳をすます」「よくよく考へる、考へをめぐらす」
ear.3SG.POSS pull

c. *⌈kna* *⌊ye-* (耳が置いてある) 「獨りでもの思ひにふける」
ear.3SG.POSS be

耳は明らかに聽覺に關する器官で、それ以外ではなささうだから、意味的擴張の方向はここでは明らかである。

(37) 聽覺事象 (知覺) →思考 (認知)

3.3 ドム語知覺表現における意味擴張の方向

*⌋pl-*の基本義が「聞く」であり、そこから非視覺的知覺全般へ、あるいは認知的意味へと派生義が出たと考へれば、知覺動詞以外に觀察される意味擴張の在り方に平行してゐることが分かる。

(38) a. 聽覺→非視覺的知覺全般 (「聞く」→「感じる」)
b. 聽覺→認知的意味 (思考) (「聞く」→「考へる、〜だと思ふ」)

---

17) 非視覺的證據が形式的に有標であることは、Viberg のつぎの觀察を想起させる。
With respect to the experiences, equivalents to *see* and *hear* are found in most languages of the sample, in spite of the fact that straightforward equivalents are often lacking for *feel*, *taste* and *smell* (as experiences). This could be captured by a lexicalization hierarchy that predicts which meanings are lexicalized by a special lexical item. But this hierarchy would only hold for experiences, since it seems partly to be reversed for the copulatives. Among them, *smell* seems to be one of the first to be lexicalized as a simple verbal root.
(Viberg, 1983, 136)
Viberg は知覺動詞を樣相だけではなく、activity (look at 等) と experience (see 等)、copulative (「〜に見える」の意の look 等) と、別の視點からもわけて論じてゐる。ここの activity、experience、copulative はその意味である。

4　をはりに

ドム語の二つの知覺動詞とその多義の在り方は、一般的な言語理論にどのやうな貢獻ができるだらうか。以下のほとんどは將來の課題である。

本稿でしばしば引用した Wierzbicka の唱導する自然意味メタ言語理論は、必ずしも多くの研究者がとる立場ではないが、本稿との關係では二つの點で重要である。一つは意味に關する一般理論として、もう一つは知覺動詞研究としてである。

一般言語學的な意味の研究は、自然意味メタ言語理論に限らず、なんらかの言語普遍的 (あるいはそれに近いはずのもの) で基本的な意味要素とその組み合せ規則を想定してゐる。自然意味メタ言語理論が特殊なのは、言語普遍的な意味要素もその組み合せ規則も自然言語に近いものであるといふ假定である。

Wierzbicka (1996) の考へる言語普遍としての意味の素 (semantic primitives) にはつぎの心的述語 (mental predicates) が含まれてゐる。

(39) a. THINK, KNOW, WANT, FEEL
　　 b. SEE, HEAR

意味の素は全ての言語において具現形をもつといふのが Wierzbicka の理論的な假定である。具現形は場合によつては一つの形式の多義の一つであることもある。

ドム語においては SEE が *lʌkan-* として、THINK, FEEL, HEAR の三つが *lʌpl-*の多義で現はれてゐると考へることができる。しかし、ドム語の「知つてゐる」具現形は何にあたるだらうか。*lʌpl-* には音聲的對象を知つてゐる意味はあつても視覺的に把握される對象を目的語として取る「知つてゐる」は *lʌkan-*でしか表現されない。また *lʌkan-*の表はす「知つてゐる」は「見た」ことにほかならず、ドム語には KNOW 「知つてゐる」一般に該當する「意味」は見出しがたい。KNOW が言語普遍的な意味の素になるかどうか、今後檢討が必要ではないか。

また WANT については本稿では觸れられなかつたが、やはりドム語に具現形が見付からないものの一つである。

より重要な問題點がある。自然意味メタ言語の考へ方では、一つ一つの意味の素はこれ以上に分析不可能な最小の意味單位であるから、上記の述語群は互ひに關係をもたないばらばらの實體と捉へられる。しかし多くの言語で上記の述語群に該當する意味は一つの形式に收められる多義が起こつてをり、なんらかの意味的な類似があると考へた方がいいのではないか。

知覺・感覺語彙の多義、そして意味轉用・擴張に關する研究も盛んである。認知言語學におけるメタファー研究は、メタファーが一つ一つ孤立してあるのではなく、認知領域間の寫像として、諸表現が一貫して領域間の寫像のパタンに從ふ、體系的なものであることを明らかにした (Lakoff & Johnson, 1980)。メタファーの起こりうる二つの領域と方向は言語依存的でありうるが、類型論的な應用もされてゐる。諸言語のパタンを集めて言語一般に起こりうる方向を確認し、起こりえない方向を言語普遍の假説として樹てられる。

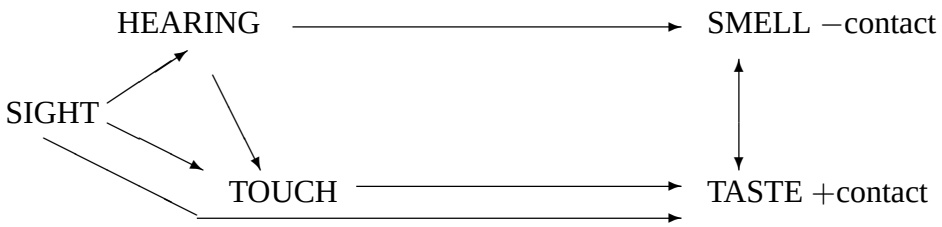

圖 3　Viberg (1983, 147)

知覺動詞間の意味の轉用に關して、Viberg (1983) は圖 3 に示した意味擴張の方向を確認した。この圖では、例へば「sight → touch」といふ矢印によつて「見る」を基本義とする語が「觸れて感じる」ことを表はすために使はれる事例があることを示してゐる。これは言語一般にあてはまる意味派生の方向を探し出す試みだつたが、その後、豪州原住民諸語について Evans and Wilkins (2000) が圖 4 に示した意味派生の方向を提出した。ここでは “proprioceptive” 「固有受容」が追加されてゐるが、胃の痛みのやうな内的感覺のことである。Viberg (1983) にない「sight → smell」、「hearing → taste」が加はつてゐるほか、「sight → touch」が豪州原住民諸語では確認できなかつたことも分かる。このやうに地域を限定することで、その地域に分布する言語の意味擴張の癖を示すこともできる。

言語一つに限つてみてもこのやうな表示方法を使ふことは可能である。ドム語では圖 5 のやうな意味擴張が起こると言へる[18)]。

ところで、本稿導入部で指摘した通り知覺の分類自體、文化・言語依存的である。すると、本來はこのやうに提示した sight や hearing といつた「意味」の普遍性をまづ議論しなくてはならない[19)]。例へば Evans and Wilkins (2000) の追加した proprioceptive といふ項目は必要だらうか。もし、全ての言語において、proprioceptive に該當する感覺を touching

18) ここでは他の言語と比較する目的で一般的な枠組に從ひ proprioceptive、smell、taste、touch を區別して圖示したが、本論で議論した通りドム語の意味のしくみの上では「非視覺的知覺」といふ一つの概念であると考へられる

19) 自然意味メタ言語理論の枠組では意味の普遍性の議論が中心的に扱はれてゐる。

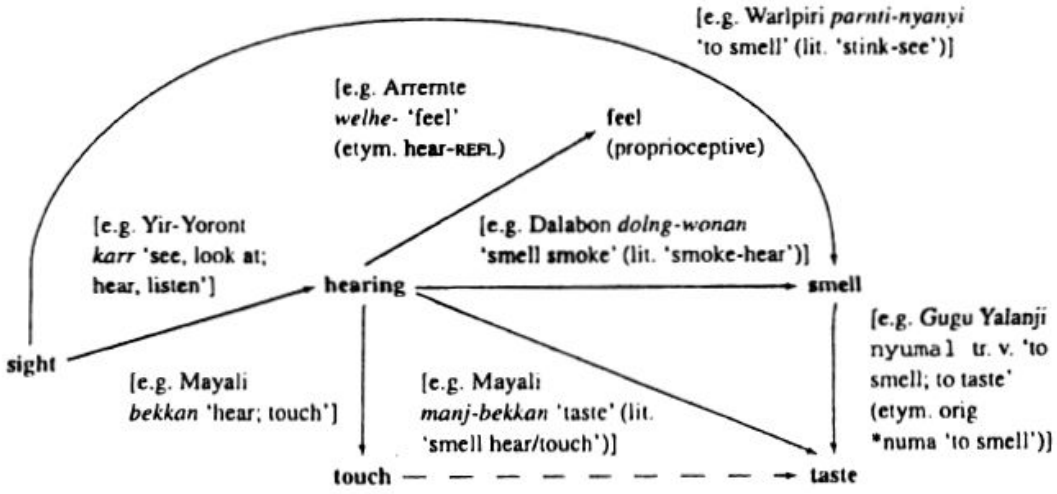

圖 4　Evans and Wilkins (2000, 560)

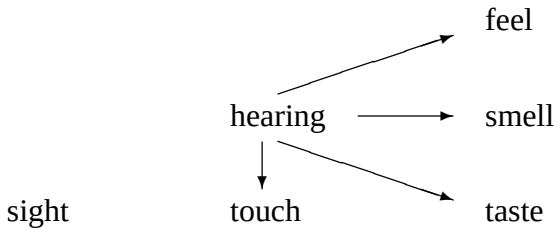

圖 5　ドム語の知覺動詞に見られる意味擴張

といふ特定の知覺を表はす動詞で表現するならば、別の「意味」として別項目にたてる必要はないかもしれない。尤も、意味普遍がなにかがわからない段階ではより細かく觀察する方が良いとも言へる。

知覺動詞の意味擴張に關して、もう一つ興味深い事實がある。Williams (1976) は次元的ひろがり (dimension) に關する屬性を基本義とする「大きい」が「大きい聲」のやうに音 (sound) をも修飾できる、といつた感覺形容詞の轉用 (所謂共感覺表現) を調べて、圖 6 のやうな圖を提案した。Williams (1976) の考へ方には問題もある。例外が多いこと、感覺の項目が恣意的に撰ばれてゐるやうに見受けられることである。例へば視覺に對して dimension と color を分けることなどが批判を受けてゐる。これもなにが意味普遍なのかといふ問題に大きく關はるもので、まづは細かく觀察した方が叮嚀ではある。

圖 6　Williams (1976, 463)

最も大きな問題は、touch から color や sound に向かふ轉用の方向が、知覺動詞の場合 (hearing → touch, sight → touch) と逆であることと思はれる。これが多くの言語に觀察される事實だとすると、メタファーが概念領域間の關係で體系的に起こるといふ考へ方に反する例となるかもしれない。

知覺動詞と共感覺表現の違ひは知覺動詞が主體的な動作を表はす述語であるのに對し、共感覺表現が知覺刺戟事象に對する形容表現であることだ。もしかすると、知覺事象 (例へば hearing) と知覺刺戟事象 (例へば sound) を同一の概念領域としてくくつてはならないばあひがあるといふことなのかもしれない。しかし、ある種の知覺刺戟事象を標示するドム語のエヴィデンシャル *ʃd-* (非視覺的に認識されるイベント) の意味の派生は、本稿で示したやうに、知覺動詞 *ʌpl-*と平行するものであつた。

意味擴張は知覺の種類 (modality) の間だけではなく、知覺から認知、經驗、感情へといふ方向でも起こる。知覺間の語彙轉用、知覺から認知への意味擴張については研究が多いが、意味・概念領域には知覺、認知のほか「經驗」「感情」などを考慮した知覺動詞・感覺形容詞研究が必要ではないか。「感じる」が感情についても使へるのはかなり一般的と思はれる。ドム語に觀察された「見る」→ 經驗・試圖の意味變化 (文法化) は日本語の「みる」、朝鮮語の po- にも見られ、これも相當に一般的であると思はれるが、網羅的であることを目指した (はずの) Heine and Kuteva (2002) の文法化の項目リストには入つてゐない。

「言ふ」といふ動詞から傳聞や聽覺證據のエヴィデンシャルに發展する文法化はよく知られてゐる。Heine and Kuteva (2002) の擧げる、「言ふ」を出處とするエヴィデンシャルの例には「傳聞」しかない。ドム語の *ʃd-* 「言ふ」から文法化されたエヴィデンシャルの用法は非視覺證據である。

このやうに、ドム語の知覺動詞の振る舞ひの記述が言語一般に關する理論に貢獻するところは大きいと思はれる。

略號

1: 一人稱、2: 二人稱、3: 三人稱、CONJ: 等位接續、DEM: 指示詞 ʌi、DL: 雙數、ENC.WA: 節末接語、EXC.: 除外形、FUT: 未來、MUT: 共有知識、IND: 直説法、INF: 連用形、INFERRED: 推測、NEG: 否定、NONVIS: 非視覺證據、PL: 複數、POSS: 所有者、Q: 引用標識、PQM: 肯否疑問、SG: 單數、SRD: 從屬法、SS: 同主語、

參考文獻

Classen, Constance (1993) *Worlds of Sense: Exploring the Senses in History and across Cultures*. London: Routledge.

Evans, Nicholas and David Wilkins (2000) In the Mind's Ear: The Semantic Extensions of Perception Verbs in Australian Languages. *Language*, 76 (3), 546–592.

Hallpike, Christopher Robert (1979) *The Foundations of Primitive Thought*. Oxford: Clarendon Press.

Heeschen, Volker (1982) Some Systems of Spatial Deixis in Papuan Languages. In Weissenborn, J. and W. Klein (Eds.), *Here and there. Cross-linguistic studies in deixis and demonstration*, 81–109. Amsterdam: John Benjamins.

Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live by*. The University of Chicago Press.

Lang, A. (1975) *The Semantics of Classificatory Verbs in Enga*. Pacific Linguistics B-39. Canberra: ANU.

Laycock, D. C. (1975) Observations on Number Systems and Semantics. In Wurm, S. A. (Ed.), *New Guinea Area Languages and Language Study Vol. 1*, Pacific Linguistics C-38, 219–233. Canberra: ANU.

Laycock, D. C. (1986) Papuan Languages and the Possibility of Semantic Classification. *Papers in New Guinea Linguistics No. 24*, Pacific Linguistics A-70, 1–10. Canberra: ANU.

Mach, E. (1918) *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen*. Verlag von Gustav Fischer. 須藤吾之助・廣松渉譯『感覚の分析』法政大学

出版局.

McElhanon, K. A. (1992) On the Concept of Person. In Dutton, Tom, Malcolm Ross, and Darrel Tryon (Eds.), *The Language Game: Papers in Memory of Donald C. Laycock*, Pacific Linguistics C-110, 241–255. Canberra: ANU.

Onishi, Masayuki (1997) The Grammar of Mental Predicates in Japanese. *Language Sciences*, 19 (3), 219–233.

Osmond, Meredith (2001) The Semantics of *Mong* in the Chimbu-Wahgi Languages of the Central Highlands, Papua New Guinea. In Pawley, Andrew, Malcolm Ross, and Darrell Tryon (Eds.), *The Boy from Bundaberg: Studies in Melanesian Linguistics in Honour of Tom Dutton*, Pacific Linguistics 514, 251–259. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific and Asian Studies.

Pawley, Andrew (n.d.) Where Have All the Verbs Gone? Remarks on the Organisation of Languages with Small, Closed Verb Classes. MS.

Piau, Julie Ann (1981) Kuman Classificatory Verbs. *Language and Linguistics in Melanesia*, 13 (1-2), 3–31.

Read, K. E. (1955) Morality and the Concept of the Person among the Gahuku-Gama. *Oceania*, 25 (4), 233–82.

Rumsey, Alan (2002) *Men Stand, Women Sit*, chap. 8, 179–211. John Benjamins Publishing Company.

Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tida, Syuntarô (2006) *A Grammar of the Dom Language*. Ph. D. thesis, Kyoto University.

Viberg, Åke (1983) The Verbs of Perception: a Typological Study. *Linguistics*, 21 (1), 123–162.

Wierzbicka, Anna (1996) *Semantics – Primes and Universals*. Oxford University Press.

Williams, Joseph M. (1976) Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change. *Language*, 52 (2), 461–478.